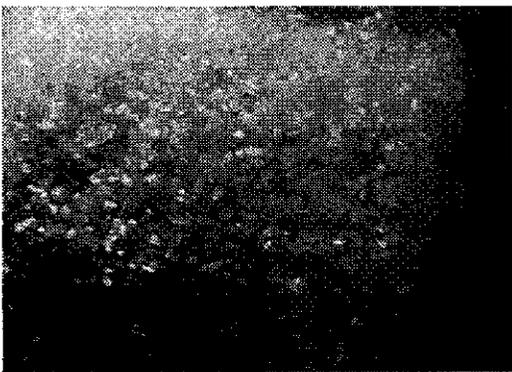


# 業界再編、撤退と買収

## 原油下落と世界同時不況の影響

### PETボトル業界の激変

従来、産業廃棄物や一般廃棄物だった廃プラスチックが有価物として購入されて、国内外に流通するという状況に大きな変化が生じた。使用済みPETボトルを扱う容器包装リサイクル業者の中でも、(財)容器包装リサイクル協会ルート(指定法人ルー)を主体に事業を行っていた業者の苦戦は続き、大手業者の事業撤退や破産が相次ぎ、その事業を買収・承継する業者があらわれた。加えて、中国輸出が止まり、激震が走った。



破碎・洗浄後のPETフレーク

### 容器業者を巡る激変

さまざまな廃プラの中でも最も変化が激しいのが使用済みPETボトルを巡る動きだ。日本国内では原油が下がってきたことで、やや買取値は下げ基調にある。とはいえ、有価物として買い取り、圧縮(ペール)してマテリアルリサイクルにまわす動きは変わらない。ただし、国内エンドユーザーの買値が下がったことで、市町村系のもを容リ協に入札して扱う業者は軒並み苦戦している。というのも、2008年度の落札単価は過去最高の4万5118円だった。現在、エンドユー

ザーの買値がバッシン価格に連動して、1キログラム当たり5円近くダウンした。つまり、高く買って安く売ることになった訳だ。

帝人が「ボトルtoボトル」の取り組みを休止したり、首都圏や西日本のリサイクル業者が破産または事業撤退で、買収されるような事態も起きているが、これは今回の原油値下がりとの動きとは直接関係ない。この2、3年の有価物化の動向に耐えていたが、限界を超えてしまったとの見方が一般的だ。

### 中国輸出急に止まる

一方、廃プラの中国輸出も急に止まった。

市町村の独自処理で買い取りを進めているリサイクル業者や商社、ベンダーや飲料メーカーからなどの事業系(産業界)の使用済みPETボトルを買い取っている業者は、多くが中国をはじめ海外に輸出してマテリアルリサイクルを行ってきたが、10月の第2週目あたりから、中国は、上海近郊や寧波市の大型繊維工場の稼働率が急降下して、原料となるPETボトルが余ってきた。年間10万ト生産する繊維工場の稼働率は、対前年30~40%となり、原料は各工場の中で山のように積み残されているという。

工場の稼働率が急激にダウンしたのは、世界同時不況の影響が出て、中国工場で作ったぬいぐるみなどが最大市場の欧米で売れなくなっているからだ。しかも、原油先物価格が下がり、繊維工場など中国のエンドユーザーは「しばらく待った方が安く再生原料を手に入れる」との判断がある。すでに日本国内の一部輸出業者の中には、国内での利用先を探し始めたが日本のユーザーも「耐えきれなくなった輸出業者がたき売るのを待つ」様子見だ。

ルとして輸出された、輸出先国でゴミやラベルなどが道路脇にそのまま放置されるという事態が起っていた。これを受けて、廃PETボトルの輸出業者は、異物を除去し、破碎・洗浄したフレークに加工するなど努力を重ねてきた。結果的に昨年、日本からのPETくずの輸出货量は、過去最高の35万トを超えた。貿易統計のFOB価格(輸出港本船積込渡値段)も年間通して1キログラム当たり58円で、今年9月まで1年以上同60円を超えるほど高値の実績を重ねてきた。しかし、今回のように、中国工場がストップして、海外での需要が下がり、国内でまわさなければならぬ事態になったとき、国内の再商品化が壊滅的になっていったのでは話にならない。国内の再生原料の価値を高め、国内利用が輸出よりも得ることを排出者にアピールするチャンスでもある。